

エジプト、グレコ・ローマン時代における テラコッタ製女神像の形態変化に関する一考察

岡部 睦*

A Study on the Morphological Change of the Terracotta Figurines of Goddesses in the Greco-Roman Egypt

Mutsumi OKABE

本稿は、エジプト、グレコ・ローマン時代のテラコッタ製女神像の通時的な形態の変化を明らかにすることを目的とする。既往研究では年代が不明瞭な資料が多く、包括的な編年が課題とされてきた。そこで、本稿では出土した層位や共伴遺物により年代の特定が可能なテラコッタ製女神像 65 点を分析対象に、本資料を構成する属性の形態分類を用いて検証を行った。分析の結果、前1世紀～後1世紀にテラコッタ製女神像の年代的な形態変化の画期があることが明らかとなった。この画期にテラコッタ製女神像の姿勢や髪型、衣装の属性に変化が認められ、特に姿勢の形態はプトレマイオス朝時代初期からみられる「裸の女神」の系統が派生する形で変化した事実を示している。さらに、ローマ美術で流行した髪型が見られるなど、当該時代のテラコッタ製女神像にローマの文化の影響も窺えるようになった点を指摘した。

キーワード：グレコ・ローマン時代、テラコッタ製女神像、形態変化

This paper attempts a morphological classification of terracotta figurines of goddesses in Greco-Roman Egypt to elucidate the morphological change of these figurines. In the previous studies, a comprehensive chronology remains debatable, as many terracotta figurines regarding dating were unclear. Accordingly, the author classified 65 terracotta figurines of goddesses from 6 sites with controlled excavations by morphological characteristics. The analysis results reveal that the morphological changes of the terracotta figurines of goddesses are similar at several sites, with a notable change between the 1st century B.C. and the 1st century A.D. In addition, the present paper shows morphological differences in the pose, hair, and costume attributes, with the postural forms developed deriving from the 'Naked Goddess' of the earlier Ptolemaic Period. Furthermore, there was an influence of Roman culture in the hairstyles.

Keywords: Greco-Roman Egypt, Terracotta Figurines of Goddess, Morphological Change

1. はじめに

グレコ・ローマン時代（プトレマイオス朝時代～ローマ支配時代）のエジプトについては、古代エジプト文化の伝統が保持されながらもギリシア・ローマ文化と融合した様相が、主に文献史学や美術史学の分野で研究されてきた（Ismail 2020）¹⁾。ただし、これらの先行研究では、プトレマイオス朝時代を中心に異文化受容とそれに伴う文化変容が検討されてきた経緯がある。考古学的な分析に関しては、過去の発掘調査における出土遺物の記録が不十分であったという問題があるほか（Ismail 2020: 756）、考古資料からの正確な年代付けが十分に行われてこなかったことから、プトレマイオス朝時代とローマ支配時代の資料の年代が混同されてきた点も課題となっている（Riggs 2010:

344-345）。ローマ帝国の支配がエジプトに重要な変化をもたらしたと考えられてきたことから（Lewis 1970; Ismail 2020: 744）、プトレマイオス朝時代からローマ支配時代の通時的な文化変容を解明することが期待されている。近年、当該時代における考古学的調査の成果は増加しており、これらの出土資料を用いることで考古学的な検証を進めることができよう。

そこで本研究では、当該時代に地中海周辺地域に広範に見られる²⁾ テラコッタ製像³⁾のうち、出土記録から年代を特定できる資料が多数検出されているテラコッタ製女神像を対象に、グレコ・ローマン時代における文化の変容をみていきたい。エジプトとギリシアの神々が習合または同一視して表現されるなど、古代エジプトとギリシア・ローマ文化の特徴の双方を有す

*金沢大学大学院・人間社会環境学研究科・博士後期課程

PhD Candidate, Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University

西アジア考古学 第25号 2024年 19-36頁 ©日本西アジア考古学会

るテラコッタ製女神像の形態の変化は、グレコ・ローマン時代を通して、エジプト文化がどのような影響を受け変化したかを検証する際に有用である。テラコッタ製女神像の形態の編年に関しては、出土記録が明らかな資料の網羅的な集成と型式学に基づいた新たな分類が必要であるが、包括的な編年は現状では認められない。したがって本稿では年代を特定できるテラコッタ製女神像について、できる限り網羅的な集成を行い、属性の形態分類を試みることで、形態の変化を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

テラコッタ製像の形態に関する先行研究では、博物館・美術館等の所蔵資料や出土資料を対象に編年や様式⁴⁾による分類が試みられてきた。例えば、J. フィッシャー (Fischer) はチュービンゲン大学考古学研究所所蔵のテラコッタ製像の編年を行い (Fischer 1994: 73-102; 2005: 308-13)、D. M. ベイリー (Bailey) は大英博物館所蔵の多くのテラコッタ製像の年代を検討した (Bailey 2008: 3)。また、M. L. アレン (Allen) はカラニス (Karanis) (Allen 1985)、J. E. ベネット (Bennett) はテル・ティマイ (Tell Timai) (Bennett et al. 2016)、R. I. トーマス (Thomas) はナウクラティス (Naukratis) (Thomas 2019) の各遺跡から出土したテラコッタ製像の年代の検討を行なった。さらに H. シュマンスカ (Szymańska) は、テル・アトリブ (Tell Atrib) から出土したテラコッタ製のいわゆるイシス・アフロディーテ女神像⁵⁾について様式に基づいた編年を試みた (Szymańska 2005: 131-144)。加えて、H. フィリップ (Philipp) によってベルリンのエジプト博物館所蔵資料の一部のテラコッタ製女神像について様式に基づいた編年が試みられている (Philipp 1972: 12-15)。

一方で、これらの先行研究では個々の博物館資料や1遺跡からの出土資料を対象とした部分的な分類や編年に留まり、テラコッタ製像の編年や型式の包括的な研究が乏しい。また、現存している多くのテラコッタ製像の来歴が不明瞭であるため、出土記録が明らかな資料を対象とした研究が必要である。近年、アコリス (Akoris) ではプトレマイオス朝時代のテラコッタ製像が発見されているほか (The Paleological Association of Japan, Inc., Egyptian Committee 1995)、北サッカラ (North Saqqara) から検出されたカタコンベの遺構からは出土コンテクストが明確なテラコッタ製像が出土している (Kawai 2020, 2021a, 2021b; 河合・吉村・柏木ほか 2020; 河合・吉村・近藤ほか 2020)。また、少数ではあるがアムヘイダ (Amheida) (Boozier 2015) やコム・ワシト (Kom



図1 本稿で分析対象とするテラコッタ製女神像が出土した遺跡の分布図 (Bagnall 2001: Fig. 1. Outline map of Egypt をもとに作成)

Wasit)、コム・アル＝アハマル (Kom al-Ahmer) (Wilson 2018-2019)、カルナク (Karnak) (Coulon et al. 2021) からの出土も確認できる。このように出土記録が明確な資料が増加しつつある中、これらの資料も含めた検討の余地が残されている。

3. 研究方法と対象資料

本研究ではグレコ・ローマン時代の遺跡から出土したテラコッタ製女神像を網羅的に集成した。中でも層位や共伴遺物による年代の特定が可能であり、かつ複数のテラコッタ製女神像が確認できるテル・ティマイ14点、テル・アル＝ヘル (Tell el-Herr) 6点、テル・アトリブ20点、北サッカラ10点、カラニス9点、モン・クラウディアヌス (Mons Claudianus) 6点の計6遺跡、65点 (表1～6: Cat. 1～65) のテラコッタ製女神像を分析対象とする (図1)。当該時代の女神を形態によって区別することは困難であることから⁶⁾ 本稿では特定の女神に限定せず、女神の要素を持つテラコッタ製像を選定した。ここでは、次の二つの条件を満たすものを女神像とする。第一にカラトス⁷⁾ やバシレイオン⁸⁾ のような頭部装飾を有すること、第二に幼少期のホルス神あるいはハルポクラテス神、またはエロスを表す子供や⁹⁾、シストルムといったアトリビュート (持物)¹⁰⁾ を有することである。ただし、胴部など部分的に残存しているもので、上記2点の基準を満たさない場合でも、既往研究で女神像と

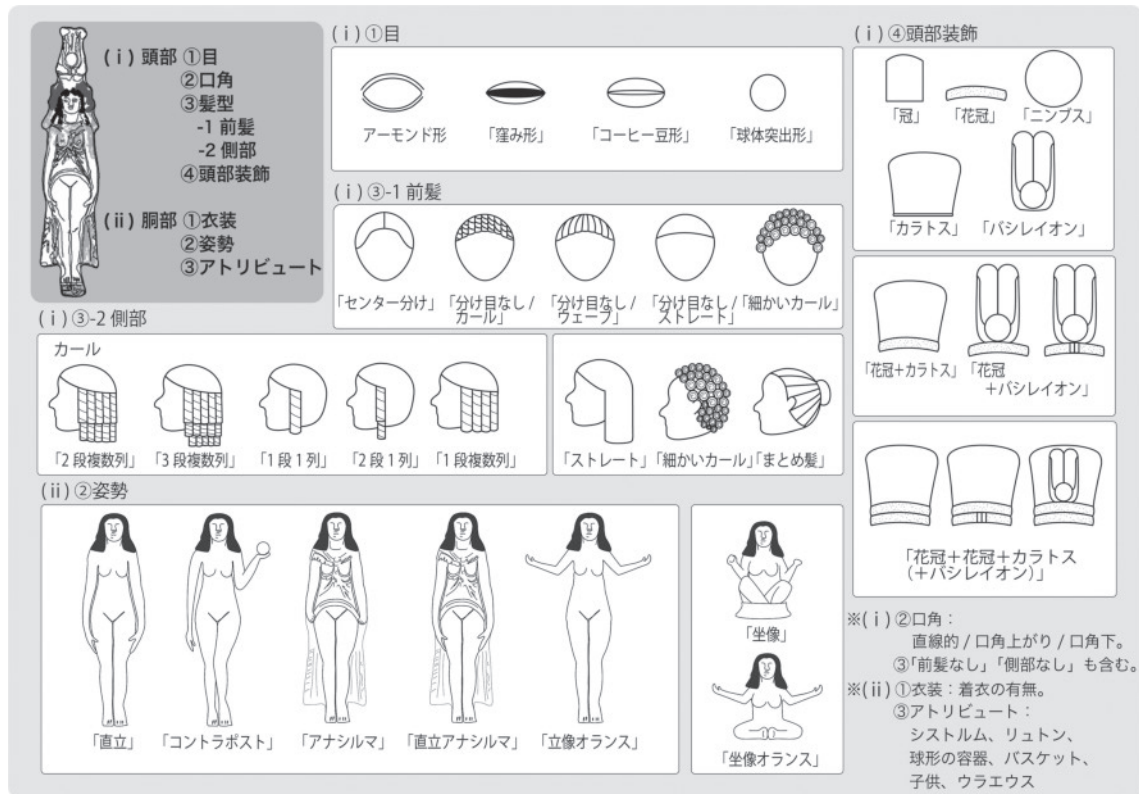


図2 エジプト、グレコ・ローマン時代のテラコッタ製女神像の属性における形態分類

して指摘されてきた、直立した姿勢の「裸の女神¹¹⁾」や、人間とは区別されると示唆されている「アナシルマ¹²⁾」(Bailey 2008: 9; Sandri 2012: 637-638)の姿勢をとる資料は女神像として選定する。さらに、イシスに関する髪型とされる縦巻きのカールの髪型を有する資料及び「イシスの結び目(ティト)¹³⁾」と呼ばれる装飾のある衣装を着用する資料についても対象とする。本稿では、各出土資料の年代は報告書に依拠し、層位または共伴遺物から年代の特定ができる資料のみ取り扱う。型式については、先行研究では抽象的かつ断片的な検討に留まり、明確な型式分類が示されてこなかった¹⁴⁾。そのうえ、完形品の出土数が少数であることから、型式を設定することは現時点では難しい。そこで本稿では、テラコッタ製女神像の型式を構成する属性まで分解し、各属性の形態の分類を行うことで年代的な変化を検証する。テラコッタ製像の分類方法については次章で詳述する。

4. テラコッタ製女神像の各属性における形態分類

テラコッタ製のいわゆるイシス・アフロディーテ女神像について、シュマンスカはテル・アトリブからの出土例を対象に、目、髪型、衣装、頭部装飾の4点において「様式¹⁵⁾」を用いることで、美術史学の「類型論(Typologie)」による編年を試みている(Szymańska

2005: 131-144)。シュマンスカの研究では、「髪のカールが少ない」や「本数が多い」という表現がされるように対象資料の個々の資料の描写にとどまり、各「様式」を分類する体系的で明確な基準が示されていない。よって編年や遺跡間の比較検討を可能にする、客観的な基準が必要である。また、テル・アトリブ出土の資料の多くが裸像であり、アトリビュートを有さない点から、衣装の表現とアトリビュートに着目した分析はほとんど進められてこなかった。さらに、シュマンスカは頭部装飾の年代的な差異を追うことは不可能であると述べているため(Szymańska 2005: 139)、本項目について他の遺跡からの出土資料も併せた検討の余地が残されている。

以上の課題から、本稿では考古学的な型式学の観点から、テラコッタ製女神像の形態の分類を試みる。ただし、すでに示したように本稿で取り扱うテラコッタ製女神像は完形品でない場合が多く、この点から型式の設定、すなわち個々の資料が有する性質のなかから、編年に有効な要素を抽出した構成を設定することは難しい。したがって、本稿では型式を構成する性質のうち、編年に有効と考えられる頭部装飾や衣装、姿勢などの属性の形態的な分類を試みた(図2)。属性の項目は、(i) 頭部属性では①目、②口角、③-1 前髪、③-2 側部、④頭部装飾、(ii) 胴部属性では①衣装、②姿勢、③アトリビュートに分けられる。各属性

の形態的な分類基準については以下に詳述する。

(i) 頭部属性における形態分類

①目：切れ長で中央部分が膨らむ形態を「アーモンド形」とする。厚い瞼で中央に窪みがある形態を「窪み形」とし、厚い瞼で中央に線刻で目が表現される形態を「コーヒー豆形」とする。円形の突出した形態は「球体突出形」とした。

②口角：本属性は3形態に分類される。それぞれ目視にて口角の両端が明らかに直線的であることが確認できる形態を「直線」、上部に向かって反る形態を「両端上がり」、下部に向かって反る形態を「両端下がり」とした。

③髪型：髪型は前髪と側部に分けられ、それぞれの組み合わせによって表現される。よって本研究では「③-1 前髪」と「③-2 側部」に分けて細分類する。

③-1 前髪：前髪の分け目の有無により「センター分け」と「分け目なし/カール」「分け目なし/ウェーブ」「細かいカール」「前髪なし」に分類される。「分け目なし/カール」は「分け目なし/ウェーブ」と比較し、丁寧なカール表現が施される点が異なる。なお、「前髪なし」は、前髪がショール等の中に入れている状態か、あるいは前髪が見られない形態を指す。

③-2 側部：大きくカールの有無で分類される。カールが確認できる場合、「カール2段複数列」「カール3段複数列」「カール1段1列」「カール2段1列」「カール1段複数列」に細分類される。カールが無い場合は「ストレート」「細かいカール」「まとめ髪」に分類される。

④頭部装飾：頭部装飾は単数～複数の要素が組み合わされて表現される（図2右）。主たる構成要素は環状の「花冠」や籠状の「カラトス」、牛の角と太陽円盤、一対の羽で構成される「バシレイオン」、小ぶりの「冠」、後頭部に円形で表現される「ニンブス¹⁶⁾」である。複数の頭部装飾の要素が用いられる場合「花冠+バシレイオン」というように標記する。

(ii) 胴部属性における形態分類

①衣装：衣装が確認できるテラコッタ製女神像について、衣装の種類を分類するためには詳細な観察が必要であり、報告書等の記録から判断することは容易ではない。よって、それぞれ着衣の有無から大きく「裸体」または「着衣」と分類する。ただし「ドーリア式キトン¹⁷⁾」や「イオニア式キトン¹⁸⁾」、「ヒマティオン¹⁹⁾」、「Vネック形のチュニック」など明らかに衣装の種類が確認できる資料については細分類を試みる。

②姿勢：姿勢は大きく立像と坐像に区分される。立像は両足が揃えられた「直立」、両手を広げた「立像オ

ランス」、体の重心を片方の脚（支脚）に乗せ、もう片方の脚（遊脚）を弛緩させて立つ「コントラポスト²⁰⁾」、性器を露出させた姿勢である「アナシルマ」に分類される。「アナシルマ」に関しては衣服の裾を手で持ち上げる姿勢である「アナシルマ」と、衣服を手で持ち上げず、両腕を体側に伸ばす姿勢である「直立アナシルマ」に細分類される。坐像は籠状の台座に着座する「坐像」、両手を広げ着座する「坐像オランス」に分けられる。

③アトリビュート（持物）：出土記録が明らかではない博物館所蔵資料において、リュトンやウラエウス、子供（幼少期のホルス神あるいはハルポクラテス神、またはエロス神）、シトゥーラや犬などさまざまなアトリビュートが確認できる。一方で、本研究で扱う考古学的記録が明らかな資料においては、少数のテラコッタ製女神像からシストルムなどの楽器やリュトン、球形の容器、バスケット、子供、ウラエウスなどのアトリビュートが見られる。本稿では、考古学的記録から年代が明らかなテラコッタ製女神像の形態変化を追うことを目的とするため、分析対象とする資料で確認できたアトリビュートのみを分類する。

5. 分析結果

本章ではテラコッタ製女神像が出土した遺跡の概要と出土遺構、及び形態分析の結果を出土した遺跡ごとにまとめ、各遺跡から出土したテラコッタ製女神像の形態変化の傾向を見ていきたい。分析の結果、(i) 頭部属性においては、それぞれの属性に連動性がみられないことから、①目、②口角、③髪型、④頭部装飾と属性ごとに分析結果を示す。一方で(ii) 胴部属性の形態に関しては、衣装やアトリビュートの有無は姿勢の属性に依拠することが明らかとなったことから併せて記載する。

(1) テル・ティマイ（図3、表1）

テル・ティマイ、古代ギリシア語名トムイス（Thmouis）はナイル・デルタの北東部、現代のダカリーヤ（Daqaliyah）州に位置する。本遺跡からは、特にグレコ・ローマン時代の焼成レンガの構造物や神殿址、浴場址、前4世紀～前2世紀の窯址などを含む生産遺構、プトレマイオス朝時代の住居址や埋葬遺構、ローマ支配時代後期の公共建築物址などが検出されている（Littman and Silverstein 2009, 2011; Littman et al. 2010, 2012, 2013; Bennett et al. 2016: 1-3）。本遺跡からは計14点のテラコッタ製女神像が出土しており、プトレマイオス朝時代（前4世紀～前1世紀）の住居址からの出土資料2点及び住居址に関連すると見られる資料4点、遺構が検出されていない



図3 テル・ティマイ遺跡出土のテラコッタ製女神像
(Bennett et al. 2016: Figs. 68-74, 76, 77, 79, 81, 82, 91, 95 をもとに作成)

層位から出土した1点、プトレマイオス朝時代末～ローマ支配時代（前1世紀～後4世紀）の宗教関連施設・工房・埋葬・行政や公共施設・商業施設といった遺構からの出土資料7点に区分される。

(i) 頭部属性

①目：多くのテラコッタ製女神像は摩耗しており、目視での目の形態の判断は困難である。確認できた目の形態は「アーモンド形」と「窪み形」の2点のみであり（Cat. 10, 11）、これらは前1世紀～後1世紀に年代づけられる。

②口角：顔部分の摩耗により、目視での形態判断ができたのは3点にとどまる。うち前4世紀～前3世紀に年代づけられる1点は「直線」（Cat. 1）であり、ほか2点は前1世紀～後1世紀に年代づけられる「両端

下がり」の資料（Cat. 10, 11）となっている。

③髪型：前4世紀～前2世紀の資料からは前髪が「分け目なし」で、側部が「まとめ髪」または「カール」のみ確認でき（Cat. 1, 2, 5）、前1世紀以降の資料では「センター分け」の前髪と複数列の丁寧な「カール」の側部のみ認められる（Cat. 10, 11）。

④頭部装飾：前4世紀～前2世紀を通して、「花冠」（Cat. 2, 5）や「カラトス」（Cat. 4）²¹⁾「バシレイオン」（Cat. 1）など1層で構成される一方、前1世紀以降にはヘルメット状の頭部装飾や柱状の冠など様々な頭部装飾が組み合わされる傾向にある（Cat. 10～12）²²⁾。

(ii) 胴部属性

姿勢と衣装の双方の属性が確認できる前4世紀～前

表1 テル・ティマイ遺跡出土のテラコッタ製女神像の形態分析リスト（－は欠損等により観察不可）

Cat.No.	年代	(i) 頭部					(ii) 胴部			残存状況	出典
		①目	②口角	③-1前髪	③-2側部	④頭部装飾	①衣装	②姿勢	③アトリビュート		
1	前4世紀	－	直線	分け目なし/ ストレート	まとめ髪	バシレイオン	裸体	直立	－	上半身	Bennett et al. 2016: fig. 81; Littman, 2011
2	前3世紀	－	－	分け目なし/ カール	カール (1段複数列)	花冠	裸体	直立	－	上半身	Bennett et al. 2016: fig. 70; Littman, 2010
3	前3世紀	－	－	－	－	－	裸体	直立	なし	胴部	Bennett et al. 2016: fig. 82; Littman, 2011
4		－	－	－	－	カラトス	－	－	－	頭部装飾	Bennett et al. 2016: fig. 95; Littman, 2013
5	前3世紀 ～前2世紀	－	－	－	カール	花冠 ※ショールあり	裸体	直立	－	上半身	Bennett et al. 2016: fig. 71; Littman, 2010
6		－	－	－	－	－	裸体	直立	－	右腕	Bennett et al. 2016: fig. 72; Littman, 2010
7		－	－	－	－	－	着衣 (キトン)	アナシルマ	－	下半身	Bennett et al. 2016: fig. 76; Littman, 2011
8	前1世紀	－	－	－	－	－	裸体	直立	－	右手と右脚部	Bennett et al. 2016: fig. 73; Littman, 2011
9		－	－	－	カール (3段以上複数列)	－	－	直立/アナシルマ	－	右肩部	Bennett et al. 2016: fig. 74; Littman, 2011
10	前1世紀～ 後1世紀	アーモンド形	両端下がり	センター分け	カール (2段2列)	ヘルメット状の 帽子	－	－	－	上半身	Bennett et al. 2016: fig. 68; Littman, 2011
11		窪み形	両端下がり	センター分け	カール (1段1列)	ヒマティオン ＋柱状の冠＋鳥	着衣 (キトン ヒマティオン)	※左手を 胸に当てる	なし	上半身 (完形品)	Bennett et al. 2016: fig. 69; Littman, 2011
12		－	－	－	－	バシレイオン＋？	－	－	－	頭部装飾	Bennett et al. 2016: fig. 77; Littman, 2013
13		－	－	－	－	－	着衣	アナシルマ	－	胴部	Bennett et al. 2016: fig. 91; Littman, 2011
14	後2世紀	－	－	－	－	－	－	オランス	－	片腕	Bennett et al. 2016: fig. 79; Littman, 2013

1 世紀の資料のうち、7 点中 6 点が「裸体」かつ「直立」の姿勢を有する (Cat. 1～3, 5, 6, 8)。「着衣」でありかつ「アナシルマ」の姿勢を有する資料は前 3 世紀～前 2 世紀に年代づけられる 1 点のみである (Cat. 7)。前 1 世紀～後 1 世紀の資料では前 1 世紀に年代づけられる資料 1 点を除いて他 2 点に「着衣」の資料が窺え、「アナシルマ」の姿勢や左手を胸に当てる姿勢など異なる様相で表現される (Cat. 11, 13)。また、本遺跡から出土したテラコッタ製女神像の胴部属性をまとめると、「直立」姿勢は「裸体」で表現される点が窺える。加えて「直立」の姿勢と、衣装を伴う「アナシルマ」の姿勢には、アトリビュートを有さないという共通点がある。

(2) テル・アル＝ヘル (図 4、表 2)

テル・アル＝ヘル、古代ギリシア語名マグドロス (Magdolos) はシナイ半島北西部に位置する。プトレマイオス朝時代の住居址や神殿の周壁址、墓地などが検出されており、後 3 世紀のローマ支配時代にはこれらの遺構の上部に要塞が建造された。なお、要塞の東門の付近では、神殿と考えられる建築址や地下室址が検出されている。本遺跡のプトレマイオス朝時代～ローマ支配時代の要塞址と住居址からは計 6 点のテラコッタ製女神像が出土している。出土記録の不足などから崇拝行為を明確に見極めることは困難ではあるが、C. E. バレット (Ballet) はテラコッタ製像が遺跡の住民の民間信仰の一端を担っていたと指摘している (Ballet 2007: 270–271)。

(i) 頭部属性

①目：前 3 世紀～前 1 世紀の資料 1 点 (Cat. 16) に

のみ「アーモンド形」が見られた。

②口角：本遺跡から出土したテラコッタ製女神像において、口角の確認はできなかった。

③髪型：前 4 世紀と考えられる資料 1 点において「分け目なし」の前髪かつ「ストレート」の側部を有する髪型が確認できる (Cat. 15)。前 3 世紀～前 1 世紀の資料に引き続き「分け目なし」の前髪が見られる一方 (Cat. 17)、センター分けの表現も認められ (Cat. 16)、双方の側部は「カール」の形態を持つ。

④頭部装飾：前 4 世紀に年代づけられる資料 1 点と前 3～前 1 世紀に年代づけられる資料において、それぞれ「冠」と「花冠」の一要素で頭部装飾が構成されている (Cat. 15～17)。

(ii) 胴部属性

胴部が確認できた資料は前 3 世紀～後 4 世紀と年代幅が非常に大きな資料 3 点のみである。これらの資料は「裸体」かつ「直立」姿勢が 2 点 (Cat. 18, 19)、「着衣」かつ「アナシルマ」姿勢が 1 点 (Cat. 20) であり、いずれもアトリビュートを有していない。本遺跡において胴部の形態の年代的な変化を追うことは困難ではあるが、「直立」姿勢は「裸体」で表現され、「直立」と「アナシルマ」の資料にはアトリビュートがない点はテル・ティマイ出土資料に類似する。

(3) テル・アトリブ (図 5、表 3)

テル・アトリブ、古代ギリシア語名アトリビス (Athribis) はベンハ (Benha) 郊外に位置する。末期王朝時代の神殿址に加え、グレコ・ローマン時代のグリッド状の道路の遺構が検出されたほか、遺跡北部には前 2 世紀の公共浴場に関連する複合施設の遺構が



図4 テル・アル＝ヘル遺跡出土のテラコッタ製女神像
(Ballet 2007: Cat. 1, 20-24 をもとに作成)

表2 テル・アル＝ヘル遺跡出土のテラコッタ製女神像の形態分析リスト（－は欠損等により観察不可）

Cat.No.	年代	(i) 頭部					(ii) 胴部			残存状況	出典
		①目	②口角	③-1前髪	③-2側部	④頭部装飾	①衣装	②姿勢	③アトリビュート		
15	前4世紀?	—	—	分け目なし/ ストレート	ストレート	冠	—	—	—	頭部	Ballet, 2007: Cat.1, Fig.179
16	前3世紀 ～前1世紀	アーモンド形	—	センター分け	カール (複数列)	花冠	—	—	—	頭部	Ballet, 2007: Cat.23, Fig.201
17		—	—	分け目なし/ カール	カール (複数列)	花冠	—	—	—	頭部	Ballet, 2007: Cat.24, Fig.202
18	前3世紀 ～後4世紀	—	—	—	—	—	裸体	直立	なし	下半身	Ballet, 2007: Cat.20, Fig.198
19		—	—	—	—	—	裸体	直立	—	右腕と右腿	Ballet, 2007: Cat.21, Fig.199
20		—	—	—	—	—	着衣 (キトン)	アナシルマ	なし	胴部 (膝より下部破損)	Ballet, 2007: Cat.22, Fig.200

確認されている。西部では工房址が検出された。そのほとんどが土器やランプ、テラコッタ製像を製作した工房である。本遺跡の東部に位置するローマ支配時代の層位からは、富裕層の集合住居址が検出されているが、200年の間にしばしば改築されたようである。さらに、ビザンティン時代の住居址や同時代の教会遺構も確認された (Szymańska 2005: 13-43)。本遺跡からは計20点のテラコッタ製女神像が出土した。これらは前3世紀～前1世紀のプトレマイオス朝時代の浴場址や工房址に由来する資料と、前1世紀～後2世紀のローマ支配時代の建築址、浴場址、行政や公共施設として利用された遺構に由来する資料である。

(i) 頭部属性

①目：前3世紀～前1世紀の資料の目は「アーモンド形」(Cat. 21, 22, 24, 27, 30)と「窪み形」(Cat. 25, 26, 28, 34)が主流である。後1世紀前半には「アーモンド形」1点が見られるが (Cat. 35)、後1世紀後半以降には「コーヒー豆形」が主流となる (Cat. 37～40)²³⁾。

②口角：前3世紀～後2世紀を通して口角が確認される資料16点のうち10点が「直線」であり、一部に「両端上がり」や「両端下がり」は見られるが、規則性は確認できない。

③髪型：前髪は前3世紀～前1世紀において「前髪なし」(Cat. 22, 24, 25, 29)や「センター分け」(Cat. 21, 26, 30, 34)、「分け目なし」(Cat. 27, 28)などの様々な形態が認められる。後1世紀以降になると「前髪なし」は見られなくなり、時代が下るに連れて「センター分け」が多数を占めるようになる (Cat. 37, 39, 40)。なお、全ての髪型の側部において「カール」表現が適用されるが、カールを構成する毛束の段数と本数に差異が見られる。

④頭部装飾：前3世紀～前2世紀の資料に「花冠」と「カラトス」が組み合わせられた形態や (Cat. 21, 22)、「花冠」単体の形態 (Cat. 24, 25)が見られ、前2世紀からは二重の「花冠」と「バシレイオン」、「カラトス」が組み合わせられた形態など (Cat. 30)、頭部装飾の多様化が伺える。さらに前1世紀以降2層以上で表現される傾向にある (Cat. 34～36, 39, 40)。

(ii) 胴部属性

前3世紀～前2世紀の多数のテラコッタ製女神像は「裸体」であり、うち3点は「直立」姿勢 (Cat. 23, 24, 30)である。同年代には2点の「着衣」の資料が見られ、1点は「コントラポスト」(Cat. 25)、他1点は「アナシルマ」(Cat. 26)の形態をとる。前1世紀以降は「着衣」のテラコッタ像が主流となり、「直



図5 テル・アトリブ遺跡出土のテラコッタ製女神像
(Szymańska 2005: Cat. 23-25, 27, 28, 30-38, 44-46, 48, 50, 51 をもとに作成)

立アナシルマ」の姿勢 (Cat. 33) と「座像」 (Cat. 36) が検出されている。さらに「コントラポスト」 (Cat. 25) と「座像」 (Cat. 36) において、前者は子供、後者はシストルムと球形の壺のアトリビュートが認められた。また、本遺跡においても「直立」姿勢には「裸体」表現が窺えた。加えて「コントラポスト」と「座像」の姿勢にのみアトリビュートが確認された。

(4) 北サッカラ (図6、表4)

北サッカラ遺跡は古代エジプト史を通して行政の中心であったメンフィスの主要墓地が存在したサッカラ遺跡の北部に位置する。本遺跡からは、現時点の見解としてプトレマイオス朝時代末期～ローマ支配時代に活動が営まれたとみられるカタコンベ (集団地下墓地) が検出されている (Kawai 2020, 2021a, 2021b; 河

合・吉村・柏木ほか 2020; 河合・吉村・近藤ほか 2020)。同遺跡からは、年代が特定できる計10点²⁴⁾のテラコッタ製女神像が出土しており、そのうちの前1世紀～後1世紀と年代づけられる資料6点はカタコンベの入口の軒蛇腹 (コーニス) の上部に置かれたステラの前から出土した。また、カタコンベ内部からも同年代のテラコッタ製女神像4点が出土している。

(i) 頭部属性

①目：目が確認できる資料において「コーヒー豆形」が2点 (Cat. 42, 43)、「窪み形」が2点 (Cat. 45, 46)、「アーモンド形」が3点見られる (Cat. 41, 44, 48)。

②口角：全ての資料において「直線」的な口角が認められる。

③髪型：「センター分け」かつ複数列の「カール」の表現が主流ではあるが、前髪と側部が確認できる8点

表3 テル・アトリブ遺跡出土のテラコッタ製女神像の形態分析リスト（－は欠損等により観察不可）

Cat.No.	年代	(i) 頭部				(ii) 胴部			残存状況	出典	
		①目	②口角	③-1前髪	③-2側部	④頭部装飾	①衣装	②姿勢			③アトリビュート
21	前3世紀初頭	アーモンド形	両端下がり	センター分け	カール (2段複数列)	花冠 +カラトス	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.23
22	前3世紀前半	アーモンド形	直線	前髪なし	カール (1段1列)	花冠 +カラトス	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.25
23	前3世紀末	—	—	—	カール	—	裸体	直立	なし	胴部 (膝より下部破損)	Szymańska, 2005: Cat.24
24	前3世紀後半 ～前2世紀前半	アーモンド形	両端上がり	前髪なし	カール (2段複数列)	花冠	裸体	直立	なし	頭部、胴部 (膝より下部破損)	Szymańska, 2005: Cat.27
25	前2世紀初頭	窪み形	両端上がり	前髪なし	カール (2段複数列)	花冠	着衣 (キトン ヒマティオン)	コントラポスト	子供、乳児	脚部一部破損	Szymańska, 2005: Cat.51
26	前2世紀前半	窪み形	両端下がり	センター分け	カール (2段2列)	花冠 +花冠 +カラトス	着衣 (イオニア式 キトン)	アナシルマ	なし	頭部装飾 一部破損	Szymańska, 2005: Cat.46
27	前2世紀	アーモンド形	直線	分け目なし/ カール	カール	カラトス	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.32
28		窪み形	直線	分け目なし/ ウェーブ	カール (2段複数)	花冠 +花冠 +半円形の冠	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.30
29		球体突出形	直線	前髪なし	カール (1段1列)	花冠 +カラトス	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.31
30		アーモンド形	直線	センター分け	カール (2段複数列)	花冠 +花冠 +パシレイオン +カラトス	裸体	直立	なし	完形	Szymańska, 2005: Cat.28
31		—	—	—	—	草冠 +花冠	—	—	—	頭部装飾	Szymańska, 2005: Cat.44
32		—	—	—	—	花冠 +花冠	—	—	—	頭部装飾	Szymańska, 2005: Cat.45
33	前1世紀	—	—	—	—	—	着衣 (キトン)	直立アナシルマ	なし	下半身	Szymańska, 2005: Cat.48
34		窪み形	直線	センター分け	カール (1段複数列)	花冠 +2本の帯 +冠	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.33
35	後1世紀前半	アーモンド形	直線	分け目なし/ カール	カール (1段複数列)	花冠 +花冠 +カラトス	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.34
36	後1世紀 ～後2世紀前半	—	直線	分け目なし/ ウェーブ	カール (1段1列)	花冠 +パシレイオン	着衣 (マント チュニック)	坐像	シストルム 球形の壺	完形	Szymańska, 2005: Cat.50
37	後1世紀後半 ～後2世紀前半	コーヒ豆形	両端上がり	センター分け	カール1段1列	—	—	—	—	頭部 (頭部装飾破損)	Szymańska, 2005: Cat.35
38		コーヒ豆形	両端上がり	—	カール (2段複数列)	—	—	—	—	顔右半面	Szymańska, 2005: Cat.36
39	後2世紀前半	コーヒ豆形	直線	センター分け	カール (1段2列)	花冠 +恐らくカラトス	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.37
40	後2世紀前半	コーヒ豆形	直線	センター分け	カール (1段1列)	花冠 +冠	—	—	—	頭部	Szymańska, 2005: Cat.38

のうち2点のみに「細かいカール」の前髪と「カール」の側部の組み合わせが見られる (Cat. 45, 46)。

④頭部装飾：全ての資料において2種類以上の要素で表現される傾向が見られる。組み合わせられる頭部装飾の要素は「コブラ」や城壁を模した「カラトス」など様々であり、他遺跡から出土したテラコッタ製女神像の頭部装飾と比較しても多様性に富むものである。

(ii) 胴部属性

前1世紀～後1世紀の資料のうち6点はドレープ状の衣装で「直立アナシルマ」の姿勢をとる。うち4点はピンク色のVネックのドレープ状の衣装であり (Cat. 45～48)、他2点には「イシスの結び目」が見られる (Cat. 42, 43)。また「コントラポスト」の姿勢の形態を有する2点はドレープ状の布を腰に着用し、上半身は裸体の表現で、右手にリュトン、左手にそれぞれ異なるアトリビュートを有する (Cat. 41, 49)。「裸体」でありかつ「直立」の姿勢は1点のみであった (Cat. 44)。

(5) カラニス (図7、表5)

カラニスはナイル川西岸のファイユームに位置し、

プトレマイオス朝時代の前3世紀に建設された都市であるが、現存しているほとんどはローマ支配時代初期の遺構である。本遺跡からはローマ皇帝ネロ (Nero: 在位54-68) 統治時代に建設された南神殿址、同じくローマ支配時代初期に建造された北神殿址、ローマ支配時代初期の浴場址、住居址が検出された。さらに、南神殿の西部と北神殿の北部には、富裕層の住居址も確認されている (Roger and Dominics eds. 2008: 131-134)。本遺跡からは、主に後2～4世紀の宗教施設に関する遺構または倉庫址から計9点のテラコッタ製女神像²⁵⁾が出土している。

(i) 頭部属性

①目：後3世紀後半～4世紀初頭にかけて「窪み形」が3点 (Cat. 53～55)、「コーヒ豆形」1点が窺え (Cat. 57)、後3～4世紀の資料1点から「窪み形」がみられる (Cat. 58)。このように後3～4世紀にかけて「窪み形」の目の表現が主流である点が見て取れる。

②口角：全ての資料において直線的な広角が認められた。

③髪型：後3世紀後半～4世紀初頭において、「分け目なし/カール」1点 (Cat. 53)、「細かいカール」3



図6 北サッカラ遺跡出土のテラコッタ製女神像 ©North Saqqara Project (NSP)
(提供：金沢大学河合研究室)

表4 北サッカラ遺跡出土のテラコッタ製女神像の形態分析リスト (―は欠損等により観察不可)
※NSのつく番号は金沢大学北サッカラ調査隊が採用している遺物番号である。

Cat.No.	年代	(i) 頭部				(ii) 胴部			残存状況	出典 遺物番号	
		①目	②口角	③-1前髪	③-2側部	④頭部装飾	①衣装	②姿勢			③アトリビュート
41	前1世紀 ～後1世紀	アーモンド形 ※1眼球が描か れる	直線	センター分け	カール (2列)	花冠 +花輪 +バシレイオン	半裸 (ドレープ状の腰布等)	コントラポスト	リュトン、 丸底の壺 ハルボクラテス	完形品	河合・吉村・近藤 ほか2020: NS05-o00900
42		コーヒード形	直線	センター分け	カール (2段複数列)	花冠 +バシレイオン	着衣(ドレープ状、 イシスの結び目)	直立 アナシルマ	なし	完形品	河合・吉村・近藤 ほか2020: NS05-o00824
43		コーヒード形	直線	センター分け	カール (2段複数列)	花冠 +バシレイオン	着衣(ドレープ状、 イシスの結び目)	直立 アナシルマ	なし	膝より下部破損	河合・吉村・近藤 ほか2020: NS05-o00857
44		アーモンド形	直線	センター分け	カール (2段複数列)	花冠 +草冠 +バシレイオン	裸体	直立	なし	足首より下部破損	河合・吉村・近藤 ほか2020: NS05-o00823, o00825
45		窪み形	直線	細かいカール	カール (2列)	花冠 +帯とコブラ冠 +カラトス	着衣 (Vネック、ドレープ状)	直立 アナシルマ	なし	左胸部破損	河合・吉村・近藤 ほか2020: NS05-o00823, o00850
46		窪み形	直線	細かいカール	カール (2列)	花冠 +帯とコブラ冠 +カラトス	着衣 (Vネック、ドレープ状)	直立 アナシルマ	なし	完形品	NS06-o00925
47		※2黒色で 描かれる	直線	センター分け	カール (2段複数列)	花冠 +バシレイオン +カラトス	着衣 (Vネック、ドレープ状)	直立 アナシルマ	なし	足首より下部破損	河合・吉村・近藤 ほか2020: NS05-o00893
48		アーモンド形	直線	センター分け	カール (2段複数列)	花冠 +バシレイオン +カラトス	着衣 (Vネック、ドレープ状)	直立 アナシルマ	なし	完形品	NS06-o00927
49		—	—	—	—	花冠 +冠	半裸 (ストール)	コントラポスト	リュトン、 ヤシの葉	顔、左下半身破損	河合・吉村・近藤 ほか2020: NS05-o00855
50		—	—	—	—	カラトス +バシレイオン (太陽円盤にコブラ付き) +麦	—	—	—	頭部装飾	NS06-o00926

点 (Cat. 54, 55, 57)、「センター分け」1点 (Cat. 56) の前髪の形態が確認でき、「細かいカール」を有するものは側部においても同様の形態となる。一方「分け目なし/カール」や「センター分け」などの前髪の形態を有する資料の側部は「カール」表現をと

る。さらに後述するように、ショールの中に髪を入れる髪型など、特有の形態が窺える。

④頭部装飾：後2～3世紀の資料1点は「ショール」を被り (Cat. 51)、後3世紀の資料1点は「バシレイオン」と見られる頭部装飾を有する (Cat. 52)。後3

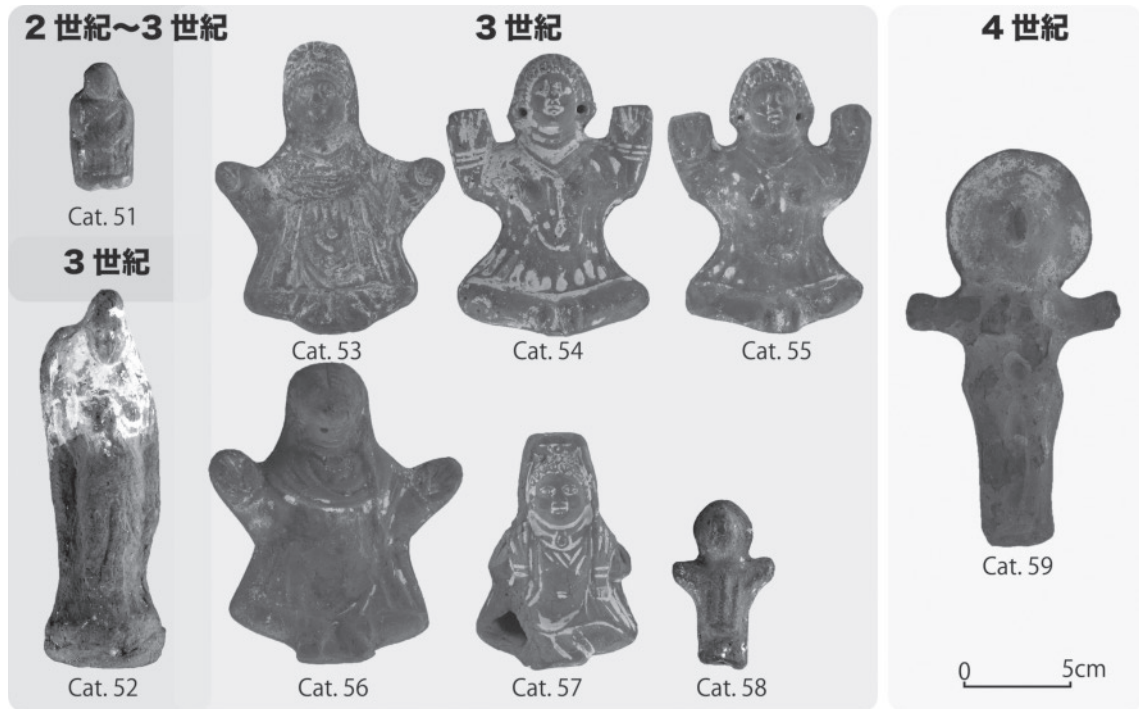


図7 カラニス遺跡出土のテラコッタ製女神像（表中の参考 HP の資料をもとに作成）

表5 カラニス遺跡出土のテラコッタ製女神像の形態分析リスト（－は欠損等により観察不可）

Cat.No.	年代	(i) 頭部					(ii) 胴部			残存状況	出典
		①目	②口角	③-1前髪	③-2側部	④頭部装飾	①衣装	②姿勢	③アトリビュート		
51	後2世紀 ～後3世紀	—	—	—	なし	ショール	着衣 (チュニック、ショール)	坐像	—	完形品 (摩耗)	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6484
52	後3世紀	—	—	—	カール	パシレイオン?	着衣 (ドレープ状の羽織、 イシスの結び目)	コントラポ スト	ウラエウス、 円形の平な容器	完形品 (摩耗)	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6487
53	後3世紀後半 ～後4世紀初頭	窪み形	直線	分け目なし/ 複数カール	カール	花冠	着衣 (Vネックのチュニック、 ショールと装飾品)	坐像 オランス	なし	完形品	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6472
54		窪み形	直線	細かいカール	細かいカール	なし	着衣 (Vネックのチュニック、 ブレスレット)	坐像 オランス	なし	完形品	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6473
55		窪み形	直線	細かいカール	細かいカール	なし	着衣 (Vネックのチュニック、 ブレスレット)	坐像 オランス	なし	完形品	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6474
56		—	—	センター分け	カール	ショール	着衣 (Vネックのチュニック、 ショールと装飾品)	坐像 オランス	なし	完形品 (摩耗)	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6475
57		コーヒード 豆形	直線	細かいカール	なし	冠+ショール	着衣 (Vネックのチュニック、 ショールと装飾品)	坐像 オランス	なし	右膝部分破損	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6477
58	後3世紀 ～後4世紀	窪み形	直線	—	—	花輪または ニンブス	着衣 (チュニック)	直立 オランス	なし	完形品 (摩耗)	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6485
59	後4世紀	—	—	—	—	ニンブス?	裸体?	直立 オランス	なし	完形品 (摩耗)	Allen 1985; University of Michigan Library Digital Collections 2022: Cat.6470

世紀後半～4世紀初頭の頭部装飾が確認できる資料3点において、「ショール」(Cat. 56)、冠の上から「ショール」を被る資料 (Cat. 57)、「花冠」(Cat. 53) が確認できた。また後3～4世紀の資料からは「花冠」または「ニンブス」を有する資料が見られるほか (Cat. 58)、後4世紀の資料1点においても「ニンブス」と見られる資料が見られる (Cat. 59)。

(ii) 胴部属性

後2～3世紀の資料ではチュニックとショールを着

用する坐像のテラコッタ製像が1点見られるほか (Cat. 51)、後3世紀の資料1点からドレープ状の羽織と「イシスの結び目」を有する「コントラポスト」の姿勢が見られる (Cat. 52)。後3世紀後半～4世紀初頭の資料5点はいずれもVネックのチュニックを着用した坐像の「オランス」であり (Cat. 53～57)、後3～4世紀の資料にはチュニックを着用した立像の「オランス」の資料も認められた (Cat. 58)。なお、後4世紀の「直立オランス」の資料1点は「裸体」で

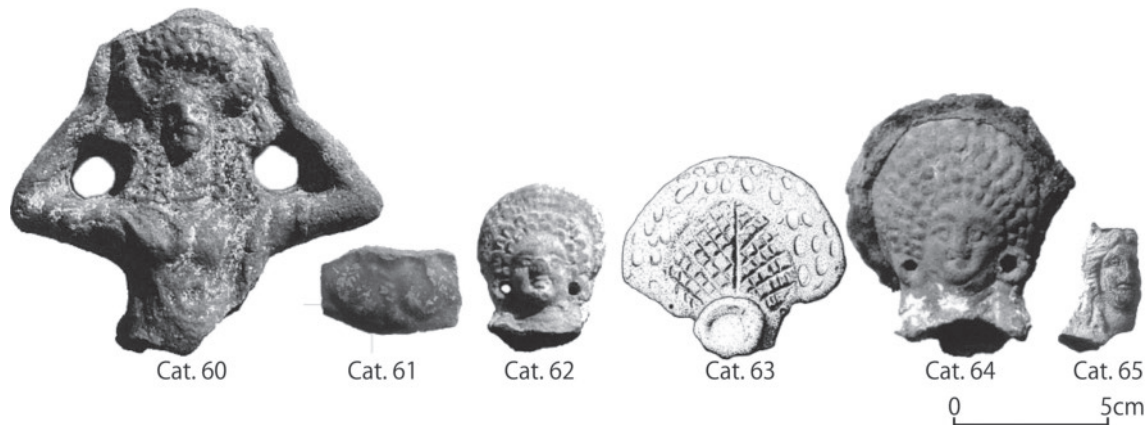


図8 モン・クラウディアヌス遺跡出土のテラコッタ製女神像
(Maxfield and Peacock eds. 2006: Cat. 1, 2, 9, 10, 11, 26 をもとに作成)

表6 モン・クラウディアヌス遺跡出土のテラコッタ製女神像の形態分析リスト (―は欠損等により観察不可)
※1 オランスまたは籠を持つ姿勢と判断できないことから本姿勢は分類項目に含めない

Cat.No.	年代	(i) 頭部					(ii) 胴部			残存状況	出典
		①目	②口角	③-1前髪	③-2側部	④頭部装飾	①衣装	②姿勢	③アトリビュート		
60	後98年 ～後117年	窪み	両端下がり	センター分け /カール?	カール (複数列)	花冠+? (一部破損)	着衣 (ドレープ状、 イシスの結び目)	腕を上げる ※1	—	上半身 (頭部装飾一部破損)	Maxfield and Peacock eds. 2006: Cat.26
61	後98年 ～後117年 以降	—	—	—	カール	—	着衣? イシスの結び目	—	—	胸部	Maxfield and Peacock eds. 2006: Cat.2
62		窪み	直線	細かいカール	細かいカール	花冠	着衣? ネックレス	—	—	頭部	Maxfield and Peacock eds. 2006: Cat.9
63		—	—	—	まとめ髪	花冠	—	—	—	頭部背面	Maxfield and Peacock eds. 2006: Cat.11
64	後117年 ～後161年	窪み	両端下がり	細かいカール	細かいカール	花冠?	着衣?	—	—	頭部 (左一部破損)	Maxfield and Peacock eds. 2006: Cat.10
65	後138年 ～後161年	アーモンド	両端下がり	センター分け /ウェーブ	カール (1列1段)	— (頭部装飾は あるが破損)	着衣	—	—	頭部	Maxfield and Peacock eds. 2006: Cat.1

あると見られるが、着衣があった可能性も考えられる (Cat. 59)。以上からカラニスの資料の着衣の有無については、その多くが「着衣」であり、後3世紀以降にVネックのチュニックを着用した「オランス」の姿勢が主流となる。さらに、本遺跡から出土したテラコッタ製女神像においても、テル・アトリブ遺跡及び北サッカラ遺跡から出土した資料と同様に「コントラポスト」の姿勢とアトリビュートの属性の有無に関係性が窺える。

(6) モン・クラウディアヌス (図8、表6)

モン・クラウディアヌスはエジプトの東部砂漠に位置する主要なローマ支配時代の採石場で、ローマ帝国の建築物に使用された円柱が生産されていた²⁶⁾。本遺跡には、中心となる砦と採石場に隣接する集落があるほか、砦やセラピス²⁷⁾ 神殿、浴場、倉庫、動物を飼育するための巨大な複合施設が確認されている。この主要な複合施設から1 km 南西には、小規模な集落が確認されている他、北東に位置する丘の中腹部に、司

令官の住居と考えられている建築物が検出されている。なお、主要な複合施設が建造される以前に存在していた集落は、モン・クラウディアヌスの採石事業の元々の中心地であったと考えられている (Roger and Dominic eds. 2008: 285-286)。本遺跡からは、計6点のテラコッタ製女神像が出土しており、後1～2世紀の要塞址やこれに伴う住居址から出土する傾向にある。

(i) 頭部属性

①目：後1～2世紀の資料2点 (Cat. 60, 62)、後2世紀の資料1点 (Cat. 64) について同様に「窪み形」が見られる他、「アーモンド形」も1点見られる (Cat. 65)。

②口角：後1～2世紀の資料のうち1点に「直線」的な口角が見られる一方 (Cat. 62)、口角が確認できる他3点の資料は全て「両端下がり」の形態をとる (Cat. 60, 64, 65)。

③髪型：後1～2世紀の資料のうち1点は「センター分け」 (Cat. 60)、他1点は「細かいカール」である

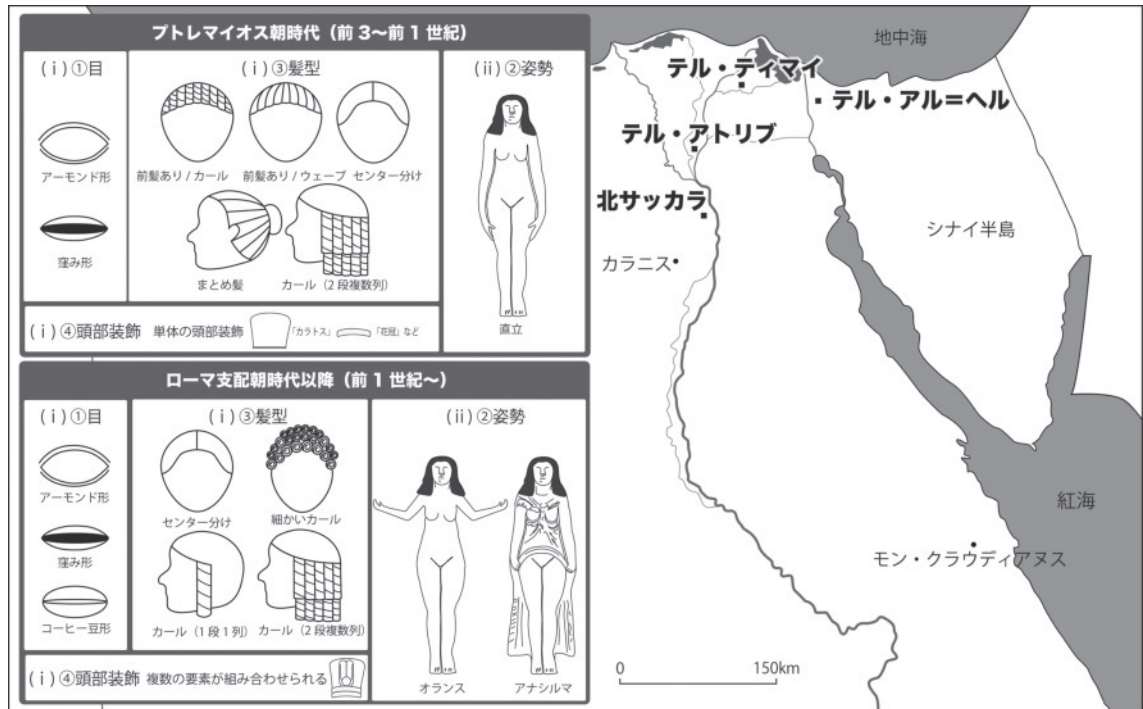


図9 テル・ティマイ、テル・アル＝ヘル、テル・アトリブ、北サッカラ遺跡出土のテラコッタ製女神像の属性の形態における年代変化

(Cat. 62)。後2世紀の資料1点においても「細かいカール」が見られるほか (Cat. 64)、「センター分け」の資料1点も出土している (Cat. 65)。側部の髪型に関しては、後1～2世紀の資料1点に「カール」複数列表現が見られる他 (Cat. 60)、「カール」表現1点 (Cat. 61)、「まとめ髪」1点 (Cat. 63)、「細かいカール」1点 (Cat. 62) と多種多様な表現となっている。後2世紀の資料も同様に1段1列の「カール」資料1点 (Cat. 65) と「細かいカール」の資料1点が見られた (Cat. 64)。モン・クラウディアヌスにおいてもカラニス出土のテラコッタ製女神像と同様に「細かいカール」の表現が見られる点が特徴的である。

④頭部装飾：後1～2世紀の資料1点において「花冠」に加え上部に頭部装飾が存在した痕跡が窺えるが (Cat. 60)、破損のため具体的な形状を推察することは困難である。なお、同年代の資料2点に「花冠」のみ有する資料が認められた (Cat. 62, 63)。後2世紀の資料1点は、破損はしているが頭部装飾を有する点が確認できる (Cat. 65)。このように、モン・クラウディアヌス出土資料では、頭部装飾は1種類のみであった。

(ii) 胴部属性

胴部が確認できる全ての資料は「着衣」であり (Cat. 60～62, 64, 65)、後1～2世紀の資料において「イシスの結び目」やドレープ状の衣装が見られる。さらに、1点にのみ姿勢の形態が確認でき、頭部装飾

付近まで腕を上げる姿勢をとる (Cat. 60)²⁸⁾。

6. 考察

テル・ティマイ、テル・アトリブから出土したテラコッタ製女神像の頭部装飾や姿勢、衣装、髪型の属性において、前1世紀から後1世紀にかけて主流となる形態に変化が見られた。さらに、テル・アル＝ヘル、北サッカラから出土したテラコッタ製女神像の形態は、上記の遺跡から出土した同時代の資料と類似する点を確認した²⁹⁾。ただし、テル・アトリブ出土資料の頭部装飾と衣装、テル・ティマイ出土資料の衣装の形態は、前2世紀から継続的に変化している点を指摘しておきたい。また、カラニスとモン・クラウディアヌスから出土したテラコッタ製女神像は、全てローマ支配時代の資料であるが、後1世紀末～2世紀以降のテラコッタ製女神像に見られる姿勢や衣装、髪型の形態において、すでに示した他遺跡で見られる前1世紀～後1世紀以降の形態と類似する点を確認した。本章では、テル・ティマイ、テル・アル＝ヘル、テル・アトリブ、北サッカラ出土資料に見られる前1世紀～1世紀間の形態の変化 (図9) と、カラニスとモン・クラウディアヌス出土資料に見られる後1世紀末以降の形態について各属性から考察を進める。

テラコッタ製女神像の目の形態は、前3世紀～前1世紀には「アーモンド形」「窪み形」が主流である

が、特にテル・アトリブ出土資料において後1世紀前後に「コーヒー豆形」が出現し、同時期の北サッカラ出土資料にも同様の形態が認められた。「コーヒー豆形」は「窪み形」を簡略化した形態であり、後1世紀前後の目の形態において簡略化する傾向が部分的に見られるようになったと考えられる。一方で、「窪み型」はモン・クラウディアヌスの後1世紀末～2世紀の資料、カラニスの後3世紀以降の資料でも多数を占めており、「コーヒー豆形」はカラニス出土の後3世紀後半～4世紀初頭の資料に見られる。つまり目の簡略化は、後1世紀前後のテル・アトリブと北サッカラを中心とした出土資料に先行してみられ、カラニス出土資料では少し遅れて確認される一方、モン・クラウディアヌスでは簡略化が起きなかった可能性がある。

頭部装飾に関しては、テル・ティマイ、テル・アトリブ出土資料において、前4～前1世紀に「花冠」や「冠」といった1層の比較的簡素な頭部装飾が主となる一方で、前1世紀以降には複数の頭部装飾が用いられる傾向が強くなることが明らかとなった。また、北サッカラ、テル・アル＝ヘル遺跡出土資料においても上記遺跡の同年代の資料の傾向と一致していることを確認した。この結果は、ヘレニズム後期以降、二重冠、花輪を組み合わせた複合冠が頻繁に用いられるというフィッシャーの推察 (Fischer 1994: 78) に一致する。しかし、後1世紀末～2世紀のモン・クラウディアヌス出土資料や後2世紀以降のカラニス出土の資料において、単体の頭部装飾が主流であることから頭部装飾の複合化には地域差がある可能性も考えられる。つまり、フィッシャーが示したヘレニズム後期以降の頭部装飾の複合化は、テル・ティマイ、テル・アトリブなどの地域で、前1世紀～後1世紀に見られる現象なのである。

次に頭部装飾そのものを構成する要素を見ていきたい。カラニス出土のテラコッタ製女神像に注目すると、花冠の他にショールやニンブスなど他の遺跡とは異なる頭部装飾を有しているほか、北サッカラ遺跡出土のテラコッタ製女神像においても特異的な頭部装飾の構成要素が見て取れる。つまり頭部装飾を構成する要素の選択という点では、その変遷の様相は出土する遺跡によって異なるのである。

続いて、髪型に注目すると、プトレマイオス朝時代初期に「まとめ髪」が主流となっていたものが、プトレマイオス朝時代末にかけて「カール」が主となる傾向にある。「まとめ髪」は古代ギリシアの女性の髪型にしばしば見られる髪型である。対して「カール」の髪型は、テル・アトリブ出土資料に見られる同様の髪型がアルシノエ3世 (Arsinoe III) の肖像から着想を得ていると指摘されてきた (Szymańska 2005: 137)。さらに、北サッカラやカラニス、モン・クラウ

ディアヌスで検出されたテラコッタ製女神像は、前髪に「細かいカール」の表現が見られる。このように前髪を全て小さなカールに巻いた、顔を縁取るような髪型はローマのフィラウィウス朝 (69年～96年) からトラヤヌス朝 (98年～117年) の女性肖像に特徴的な髪型とされており (芳賀・芳賀 2017: 361–362; Ballet 2020: 132–133)、髪型の変化の要因として当時の流行がその一要因として考えられる。ただし、北サッカラ出土資料に注目すると同時代の同じ姿勢の資料において「細かいカール」の資料と、プトレマイオス朝時代初期から見られる縦巻きの「カール」で表現される資料の双方が窺える。つまり、髪型においては当時の流行を取り入れつつも、その表現方法には選択肢があったと推察される。

胴部属性の形態に関しては、姿勢と衣装の有無、アトリビュートの有無に密接な関係が認められた。つまり、本稿で取り扱った女神像の「直立」姿勢は全て「裸体」であり、アトリビュートが用いられるのは「コントラポスト」と「座像」の姿勢に限られていた。「裸体」で表現される「直立」姿勢は、プトレマイオス朝時代初期に現れた「裸の女神」像に認められる。この「直立」姿勢は前4世紀～前1世紀の主流であったが、前1世紀以降には着衣の「アナシルマ」又は「オランス」の姿勢が増加することが明らかとなった。「アナシルマ」の姿勢に注目すると、「アナシルマ」に「直立」姿勢が組み込まれた「直立アナシルマ」に分類されるテラコッタ製女神像が検出されており、M. フィンク (Fink) が指摘するように「直立」の女神像からの連続性が窺える (Fink 2008, 2009)。また、カラニス出土の「オランス」のテラコッタ製女神像に注目すると、背面部分のみ裸体で表現されている。加えて、フィッシャーは後4世紀になると「裸の女神」が「オランス」と融合する点を指摘しているように (Fischer 1994: 78)、「オランス」についても「直立」姿勢から派生した形態と考えることができる。したがって前1世紀以降に主流となる「アナシルマ」及び「オランス」姿勢のテラコッタ製女神像はいずれも裸体では表現されないものの、所謂「裸の女神」の姿勢の表現を受け継ぐ形態であると言える。また、衣装を必要とする「アナシルマ」姿勢の増加は、「着衣」を有するテラコッタ製女神像の増加を示すものであり、「オランス」にもしばしば「着衣」の表現が用いられた。「アナシルマ」と「オランス」姿勢が主流となる前1世紀以降に、姿勢と連動して「着衣」の表現が増加したのである。

最後に口角に注目する。口角は北サッカラ出土資料において、「直線」が主流となるなど、大多数を占める形態がある一方、テル・アトリブ出土資料では様々な口角が年代に関係なく無作為に用いられていた。

よって口角の形態には年代的な差異は認められず、各遺跡における特徴、あるいは製作者による差異が出現していると考えられる。

上記で検討してきた形態変化を整理すると、テル・ティマイ、テル・アル＝ヘル、テル・アトリブ、北サッカラ出土のテラコッタ製女神像において、前1世紀以降、頭部装飾は複数の要素が組み合わせられる傾向、衣装の有無は「裸体」から「着衣」へと変化する傾向、髪型は当時の流行が取り入れられる傾向、姿勢は「直立」型から派生した形態が用いられる傾向が見られる。そして、前1世紀以降の頭部装飾を除く髪型と衣装、姿勢の形態の傾向は後1世紀末から後4世紀まで継続的にみられることをカラニス、モン・クラウディアヌス出土のテラコッタ製女神像で確認した。なお、頭部装飾に関しては、カラニスとモン・クラウディアヌス出土資料において後1世紀末以降から後4世紀に単一の頭部装飾が主流となる点、頭部装飾を構成する要素の選択には年代的な差異は認められない点から、その形態変化には年代以外の要因も検討する必要がある。加えて、目の形態が簡略化される傾向は、1遺跡または1地域でみられる現象である可能性があり、グレコ・ローマン時代のエジプト全域で共通する形態の変化ではない。前1世紀～後1世紀の資料に窺える髪型と衣装、姿勢の形態の傾向が後世のカラニス、モン・クラウディアヌスでも続いてた事実を積極的に受け入れるならば、グレコ・ローマン時代のテラコッタ製女神像の形態変化の画期は前1世紀～後1世紀に見られる。姿勢の形態変化は、形態そのものに変化が見られるものの、プトレマイオス朝時代初期にすでに見られた「裸の女神」の要素から派生した変化であるのに対し、髪型の形態変化は当時の流行が用いられるなど、革新的な変化であったのではないだろうか。

7. おわりに

本稿では、出土記録から年代が特定でき得るテラコッタ製女神像を対象に、その形態の変化を明らかにすることを目的とし、女神像を構成する属性の形態分析を行なった。分析の結果、テル・ティマイやテル・アトリブでみられるように、プトレマイオス朝時代初期（前4世紀）にすでに成立していたテラコッタ製女神像の形態変化の画期は前1世紀から後1世紀であることが明らかとなった。加えて、テル・アル＝ヘルと北サッカラ遺跡出土資料においても、テル・ティマイやテル・アトリブ遺跡から出土した同時代の資料と類似する点を確認した。この画期の特徴としては、プトレマイオス朝時代初期から見られる「裸の女神」の要素を示す「直立」が派生する形で姿勢が変化する点、ローマ美術の彫像で流行した髪型が見られるように

なった点が挙げられる。すなわち上記4遺跡から出土したテラコッタ製女神像において、プトレマイオス朝時代初期から見られる姿勢の「裸の女神」の概念が継続的に使用された一方で、プトレマイオス朝以降のローマの文化の影響も受けていたと考えられる。一方で、主にローマ支配時代から形成された集落であるカラニスやモン・クラウディアヌスから出土したテラコッタ製女神像では、髪型と衣装、姿勢において上記4遺跡の後1世紀以降の出土資料と同様の傾向が窺えるが、頭部装飾や目は異なる傾向を示した。このような形態の差異の要因は、出土する遺跡の性格や文化伝統が影響している可能性が高いと考えるが、他のモチーフも含めた他遺跡の分析資料を追加し検証を積み重ねることで、今後の課題としたい。さらに、アトリビュートや頭部装飾の構成要素は、エジプトの女神であるイシスやハトホルおよびギリシア・ローマの女神の特性を示すものであり、これらの時代差や遺跡間での差異を細分析することで、テラコッタ製女神像に表現されるエジプト文化とギリシア・ローマ文化の選択や受容の要因を明らかにしていきたい。

謝辞

本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム(JPMJSP2135)および科研費・基盤研究(B)「エジプト、北サッカラ遺跡における新王国時代墓地の総合的調査研究」(研究代表者:河合望、研究課題番号:19H01337)、科研費・基盤研究(A)「エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究」(研究代表者:河合望、研究課題番号:23H00014)の支援を受けたものである。また、本稿は2020年1月に金沢大学大学院人間社会環境研究科に提出した修士論文の一部と第27回日本西アジア考古学会(帝京大学文化財研究所)で発表した「エジプト、グレコ・ローマン時代におけるテラコッタ製女神像の変容について:類型分析からみる形態変容の考察を中心に」の内容を大幅に加筆・修正したものである。本稿の執筆にあたり、指導教授である河合望教授(金沢大学)をはじめ、カルロ・リンディ・ヌツォロ研究員(イェール大学)、ジェシカ・ニチケ研究員(ステレンボッシュ大学)にご教示を賜った。修士論文の執筆時には、当時金沢大学に所属する日本学術振興会PD研究員であった肥後尚講師(筑波大学)、山崎世理愛講師(早稲田大学)より貴重なご助言をいただき、キャサリン・デビス助教(ミシガン大学)にはカラニス遺跡出土資料に関する貴重な情報を賜った。また、査読者の方々や『西アジア考古学』編集委員会の方々からは貴重なご指摘を多数いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

註

- 1) このような異文化受容の様相を示す例には、S. A. アシュトン(Ashton)が指摘するように、プトレマイオス朝時代のエジプトの彫像や図像について、当時の支配者がギリシア文化とエジプト文化を組み合わせることで双方の支配者であることを示した点が挙げられる(Ashton 2001)。また、L. トロク(Török)はプトレマイオス朝時代初期のテラコッタ製像の様式にヘレニズム文化との融合が見られる点を指摘した(Török 1995: 22)。

- 2) エジプトで製作されたテラコッタ製像はしばしばプトレマイオス朝時代以前にも見られ、手捏ねや型 (mold) による成形、ろくろ成形など様々な方法で作られていた (Bailey 2008: 5)。グレコ・ローマン時代に範型を使用した製作技術が導入されたことで、テラコッタ製像は大量生産され、地中海周辺地域に広範に見られるようになった (Sandri 2012: 630)。
- 3) テラコッタ製像のモチーフには、ハルポクラテス神 (註9 参照) やホルス神の母であり、病気の治癒能力を持つイシス女神、セラピス神 (註27 参照)、舌を出し、ライオンの耳を持つベス神などの神々のほか、人間ではない存在、人間、動物などがある (Fischer 1994: 102; Bailey 2008: 13; Sandri 2012: 633-643; Helmbold-Doye 2015: 62-68)。
- 4) 本稿における「様式」の概念は美術史学における「普遍的な観照および表現の方式 (神林ほか編 1989: 22)」の意味をとる。つまり、対象となる作品が制作された時代や地域において流行した作品のスタイル、作者の癖、さらには作者が属する流派を指す。
- 5) プトレマイオス朝時代にはイシス女神とアフロディーテ女神が同一視されたことから、バシレイオン (註8 参照) やカラトス (註7 参照) を有する女神像については、しばしば「イシス・アフロディーテ」と特定の女神の名称で示される。しかし、同時代にはイシス女神やハトホル女神も同一視された傾向にあることから、「ハトホル・アフロディーテ」と解釈された例も窺える (Colin 1994: 534-539; Bailey 2008: 8) (註6 参照)。
- 6) グレコ・ローマン時代には古代エジプトの伝統的な女神であるイシス女神やハトホル女神が混同して表現された例や、これらの女神がアテナ、デメテル、アフロディーテなど、古代ギリシアの神々と習合または同一視された姿で表された例があることから (Fischer 1994: 78)、女神の特定は困難な場合が多い。
- 7) カラトスは大型の籠状の形態をとり、デメテルやアフロディーテの象徴として用いられる頭部装飾である (Malaise 2014: 259)。
- 8) バシレイオンは牛の角と太陽円盤、一對の羽で構成され、ハトホルの象徴として用いられる頭部装飾である (Nagel 2015: 196)。
- 9) グレコ・ローマン時代のエジプトのテラコッタ製像のモチーフにおいて子供に分類されるものの多くは、幼少期のホルスあるいはホルス神が子供や青年になった姿で表されるハルポクラテス神、またはギリシアの神のエロス神である (Sandri 2012: 634-635)。前者はイシス女神 (Ballet 2020: 140-141)、後者はアフロディーテ女神とともに表現される傾向にあり、ハルポクラテスは円形あるいは楕円形のポット、エロスはトーチがアトリビュート (註10 参照) となる傾向がある (Sandri 2012: 634-635)。
- 10) 「アトリビュート」は表される人物や神などが誰であることを示すために、慣習的にその人物と結びつけて表現される物品を指す (佐々木監 1989: 28)。特に、幼少期のホルス神あるいはハルポクラテス神はイシス女神、エロス神はアフロディーテ女神と同時に表現される点、シストルムはハトホル女神に関連して用いられる傾向にある点から女神像の象徴となっている。
- 11) 「裸の女神」は手足を揃え、直立する姿で表される女神像であり、フィッシャーはヘレニズム時代に古い伝統として発展した女神像として位置付けた (Fischer 1994: 77-78)。
- 12) 「アナシルマ」とは女神が服の裾を手で持ち上げ、性器を露出させる姿勢を指す。この姿勢について、F. デュナン (Dunand) は、これらの像が女性と出産の守護神であるイシス・ブバステイスを表していると示唆した (Dunand 1973: 85)。さらに、ベイリーは女神を表している可能性があるとして示唆している (Bailey 2008: 9)。
- 13) 「イシスの結び目」とは女神像の胸部中央の結び目を指し (Nagel 2015: 196)、この表現は新王国時代まで遡ることができる (Bailey 2008: 9)。
- 14) 美術史的な様式に基づき対象資料を描写している点から、明確な型式分類の項目は示されていない (Philipp 1972: 12-15; Szymańska 2005: 140-142)。
- 15) シュマンスカはテル・アトリブから出土したテラコッタ製像のうち、イシス・アフロディーテ像のみ「類型学 (Typologie)」に基づいて示すことができると指摘した (Szymańska 2005: 140-142)。シュマンスカが用いた「類型」は美術史学の様式に基づくものであり、考古学における型式 (Typology) とは区別される。
- 16) ニンプスとは聖なる光に満たされた聖人、その他の人物の頭部を囲む円光あるいは光の円盤を指す。プトレマイオス朝時代の王の肖像や後1世紀のローマ帝国貨幣の皇帝肖像に表されるように、神性の象徴として表されている (佐々木監 1989: 756)。
- 17) ドーリア式キトン、ペプロス (長方形の布で身体の前後をおおい両肩を留針などで留める衣装) を原型とする古代ギリシアの衣装であり、ギリシアにおいてはアテナイやスパルタなどの婦人が着用したとされる (丹野 1985: 61-63)。
- 18) イオニア式キトンは、筒型の麻布を顔と両腕が出せるように縫った古代ギリシアの服飾である。ウエスト部分をベルトで縛ることでドレーパリーができるため、ドーリア式キトンと比較して優美な印象が与えられる効果がある (丹野 1985: 63-64; 中村 2017: 111)。
- 19) ヒマティオンは、古代ギリシアの衣装のうちの掛けを指し、長方形の布地を一部縫い合わせ肩から掛ける衣装である (中村 2017: 111)。
- 20) コントラポストは人体の諸部分の作用と反作用を言い表す言葉であり、当表現を用いることで人体に近い表現を可能とする表現方法である (佐々木監 1989: 436-437)。
- 21) Cat. 4について、既往研究ではデメテル信仰に関するバスケット状の頭部装飾と指摘されており (Bennett et al. 2016: 24)、本資料の大きさから頭部装飾である可能性が高い点、破損した下部に頭部が続くと考えられる点から女神像の一部として集成した。
- 22) Cat. 12に関して、中央の太陽円盤とその両端に牛の角が確認できることからバシレイオンであると断定できる (Bennett et al. 2016: 21)。
- 23) 女神以外のテーマを含めた、テル・アトリブ出土のテラコッタ製像の先行研究では、プトレマイオス朝時代初期には細長い形またはアーモンド形の小さな目が主流であり、プトレマイオス朝時代末 (前2~前1世紀) に厚い瞼の表現が登場し、後3世紀以降は大きな目が表現されるようになると指摘されている (Szymańska 2005: 132-136)。
- 24) 北サッカラ遺跡出土のテラコッタ製女神像10点のうち、3点 (Cat. 46, 48, 50) は2023年3月 (第6次調査) に出土しており、これらの資料の詳細は北サッカラ遺跡第6次調査の概報において掲載予定となっている。なお本稿への掲載に際し、隊長である金沢大学の河合望教授より許可を得た。
- 25) Cat. 51について、玉座に座る構図をとることから、イシス女神あるいはセラピス神である可能性が考えられる。前者の場合にはホルスを伴うが、対象となる資料が摩耗していることからアトリビュートは確認できなかった。しかし、先行研究ではイシス女神の可能性が指摘されているほか (Allen 1985: 404)、頭部にショールがかけられている点から、イシス女神である可能性が高いと判断した。なお

- Cat. 53~59に見られる「オランス」の姿勢は神像であると考えられてきた一方で、祈る姿から所有者の眷属を表しているとする既往研究もある (Török 1995: 127-128; Bailey 2008: 43)。しかし、「オランス」の姿勢で頭部装飾が認められない資料の中でも、正面部分は着衣、背面は裸体で表現され、神殿跡から出土する例も窺える (Cat. 54, 55)。このように部分的に裸体表現が見られる点や出土コンテキストから、「オランス」の姿勢を有する女性の像は女神像である可能性が高いと考える。
- 26) モン・クラディアヌスで採掘された花崗閃緑岩はローマに建造されたローマ皇帝トラヤヌス (Trajanus: 在位 98-117) のフォルム内のパシリカ・ウルピア (Basilica Ulpia) やティヴォリ (Tivoli) に建造されたローマ皇帝ハドリアヌス (Hadrianus: 在位 117-138) の別荘、パンテオンなどの公共建築物でのみ使用される傾向にある (Peacock et al. 1994: 229)。
- 27) エジプトにおけるヘレニズム化の象徴であるセラピス神はプトレマイオス朝時代からみられる神であり、エジプトの主神であるオシリスと雄牛の姿をしたエジプトの神であるアピスと関連付けられる (Helmbold-Doye 2015: 62-68)。
- 28) 頭上にバスケットを有していた可能性が示唆されている (Maxfield and Peacock eds. 2006: 271-272)。
- 29) 前1世紀~後1世紀に年代づけられる北サッカラ遺跡出土資料10点、前4世紀と前3世紀~前1世紀に年代づけられるテル・アル=ヘル遺跡出土資料3点の特徴がテル・ティマイ、テル・アトリブ遺跡の同時代の資料と類似する。ただし、胴部が確認できる前3世紀~後4世紀のテル・アル=ヘル出土資料3点は、年代による形態の差異を確認することは困難である。しかし、姿勢と衣装、アトリビュートの関係性について「直立」姿勢にのみ「裸体」の表現がされており、さらに「直立」姿勢と「アナシルマ」姿勢のいずれの姿勢にもアトリビュートは認められない点はテル・ティマイ、テル・アトリブ、北サッカラ遺跡出土資料に類似することが明らかとなっている。
- 参考文献**
- Allen, M. L. 1985 *The Terracotta Figurines from Karanis: A Study of Technique, Style and Chronology in Fayoumic Coroplastics*. Ph.D. dissertation. Ann Arbor, University of Michigan.
- Ashton, S. A. 2001 *Ptolemaic Royal Sculpture from Egypt: The Interaction between Greek and Egyptian Traditions*. BAR International Series 923. Oxford, Archaeopress.
- Bagnall, R. S. 2001 Archaeological Work on Hellenistic and Roman Egypt, 1995-2000. *American Journal of Archaeology* 105(2): 227-243.
- Bailey, D. M. 2008 *Catalogue of Terracottas in the British Museum Volume IV, Ptolemaic and Roman Terracottas from Egypt*. London, The British Museum Press.
- Ballet, P. 2007 Les terres cuites hellénistiques et romaines. In D. Valbelle (ed.), *Tell el-Herr. Les niveaux hellénistiques et du Haut-Empire*, 236-271. Paris, Errance.
- Ballet, P. 2020 *Figurines et société de l'Égypte ptolémaïque et romaine*. Paris, Éditions Picard.
- Bennett, J. E., R. J. Littman and J. Silverstein 2016 *The Terracotta Figurines from Tell Timai: 2009-2013*. BAR International Series 2834, Oxford, BAR Publishing.
- Boozer, A. L. 2015 *Amheida II: A Late Romano-Egyptian House in the Dakhla Oasis: Amheida House B2*. Institute for the Study of the Ancient World Monographs Book 4. New York, New York University Press.
- Colin, F. 1994 Le P.Petr.² I, 1, les terres cuites isiaques et le culte d'Isis et Aphrodite-Hathor. In A. Bülow-Jacobsen, (ed.), *Proceedings of the 20th International Congress of Papyrologists, Copenhagen 23-29 August, 1992*, 534-539. Copenhagen, Museum Tusculanum Press.
- Dunand, F. 1973 *Le culte d'Isis et les Ptolémées. Études préliminaires aux religions orientales dans l'Empire romain*, Volume: 26/1. Leiden, Brill.
- Fink, M. 2008 "Nackte Göttin" und Anasyroméne Zwei Motive- eine Deutung? (1. Teil). *Chronique d'Égypte* LXXXIII: 298-317.
- Fink, M. 2009 "Nackte Göttin" und Anasyroméne Zwei Motive - eine Deutung? (2. Teil). *Chronique d'Égypte* LXXXIV: 335-347.
- Fischer, J. 1994 *Griechisch-Römische Terrakotten aus Ägypten: Die Sammlungen Sieglin und Schreiber : Dresden, Leipzig, Stuttgart, Tübingen*. Berlin, Ernst Wasmuth Verlag Tübingen.
- Fischer, J. 2005 Die Entwicklung der Götterfigur in der griechisch-römischen Koroplastik Ägyptens. In H. Beck, P. C. Bol and M. Bückling (eds.), *Ägypten, Griechenland, Rom; Abwehr und Berührung*, 347-354. Tübingen, Wasmuth.
- Helmbold-Doye, J. 2015 Religion in Roman Egypt. In C. Fluck, G. Helmecke and E. R. O'Connell (eds.), *Egypt Faith after the Pharaohs*, 62-72. London, The British Museum.
- Ismail, K. E. 2020 The Ptolemaic and Roman Periods. In I. Shaw and B. Elizabeth (eds.), *The Oxford Handbook of Egyptology*, 744-760. Oxford, Oxford University Press.
- Kawai, N. 2020 The Discovery of a Roman Catacomb at North Saqqara. *Egyptian Archaeology* 57: 10-15.
- Kawai, N. 2021a Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: Preliminary Results of the Archaeological Survey at North Saqqara. The 2016 and 2017 Seasons. In M. Bárta, F. Coppens and J. Krejčí (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2020*, 245-262. Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- Kawai, N. 2021b A Newly Discovered Roman Catacomb at North Saqqara: Recent Results and Future Prospects. In M. Bárta, F. Coppens and J. Krejčí (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2020*, 331-346. Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- Lewis, N. 1970 Greco-Roman Egypt: Fact or Fiction? In D. H. Samuel (ed.), *Proceedings of the Twelfth International Congress of Papyrology*, 3-14. Toronto, Hakkert.
- Littman, R. and J. Silverstein 2009 Excavations at Tell Timai 2009, University of Hawaii, Season 1, 24 July to 20 August 2009. *Tell Timai Archaeological Project*. https://telldimai.org/pdf/Excavations_at_Tell_Timai_2009.pdf (2022年10月31日閲覧)
- Littman, R., J. Silverstein, N. Hudson and J. Trampier 2010 Excavations at Tell Timai 2010, University of Hawaii, Season 2, May 20 to 14 July 2010. *Tell Timai*

- Archeological Project*. https://telltimai.org/pdf/Excavations_at_Tell_Timai_2010.pdf (2022 年 10 月 31 日閲覧)
- Littman, R. and J. Silverstein 2011 Excavations at Tell Timai 2011, University of Hawaii, Season 3, June 12 to 15 July 2011. *Tell Timai Archeological Project*. https://telltimai.org/pdf/Excavations_at_Tell_Timai_2011_Summer.pdf (2022 年 10 月 31 日閲覧)
- Littman, R., J. Silverstein and M. Kenawi 2012 Excavations at Tell Timai 2012, University of Hawaii, December 1 to 27, 2012. *Tell Timai Archeological Project*. https://telltimai.org/pdf/Excavations_at_Tell_Timai_2012_Winter.pdf (2022 年 10 月 31 日閲覧)
- Littman, R., J. Silverstein and M. Kenawi 2013 Excavations at Tell Timai 2013, University of Hawaii, May 14 to July 12, 2013. *Tell Timai Archeological Project*. https://telltimai.org/pdf/Excavations_at_Tell_Timai_2013_Summer.pdf (2022 年 10 月 31 日閲覧)
- Malaise, M. 2014 Le calathos sur la tête d'Isis: une enquête. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 43: 223-265.
- Marchand, S. 2021 Le mobilier en terre cuite, faïence et pierre de la fin de la Troisième Période intermédiaire à l'époque romaine. In S. Boulet, C. Defernez, S. Marchand, F. Payraudeau, R. Meffre, F. Gombert-Meurice, A. Guillou, A. Hallmann, S. Rickerby, L. Shekede and N. Souchon, *Karnak- Sanctuaires osiriens (2020)*. *Bulletin archéologique des Écoles françaises à l'étranger*. <https://doi.org/10.4000/baefe.2950> (2022 年 10 月 31 日閲覧)
- Maxfield, V. A. and D. P. S. Peacock (eds.) 2006 *Survey and Excavation. Mons Claudianus. 1987-1993. Vol. 3, Ceramic Vessels & Related Objects*. FIFAO 54. Cairo, Institut Français d'archéologie orientale.
- Nagel, S. 2015 The Goddess's New Clothes. Conceptualising an 'Eastern' Goddess for a 'Western' Audience. In A. Flüchter and J. Schöttli (eds.), *The Dynamics of Transculturality: Concepts and Institutions in Motion*, 187-217. Heidelberg, Springer.
- Peacock, D. S. P., O. Williams-Thorpe, R. S. Thorpe and A. G. Tindle 1994 Mons Claudianus and the Problem of the "granito del foro": A Geological and Geochemical Approach. *Antiquity* 68: 209-230.
- Philipp, H. 1972 *Terrakotten aus Ägypten im ägyptischen Museum Berlin*. Berlin, Gebr. Mann.
- Riggs, C. 2010 Tradition and Innovation in the Burial Practices of Roman Egypt. In M. Minas-Nerpel, S. Pfeiffer and K. Lembke (eds.), *Tradition and Transformation in Roman Egypt*, 343-356. Leiden, Boston, Brill.
- Roger, S. B. and W. R. Dominic (eds.) 2008 *Egypt: From Alexander to the Copts*. Cairo, The American University in Cairo Press.
- Sandri, S. 2012 Terracottas. In C. Riggs (ed.), *The Oxford Handbook of Roman Egypt*, 630-647. Oxford, Oxford University Press.
- Szymańska, H. 2005 *Terres cuites d'Athribis*. Monographies Reine Élisabeth 12. Turnhout, Brepols.
- The Paleological Association of Japan, Inc., Egyptian Committee 1995 *Akoris: Report of the Excavations at Akoris in Middle Egypt, 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo.
- Thomas, R. I. 2019 Terracotta and Stone Figurines from Naukratis. *British Museum Studies in Ancient Egypt and Sudan* 24: 175-203.
- Török, L. 1995 *Hellenistic and Roman Thracottas from Egypt*. Roma, L'ERMA di Bretschneider.
- University of Michigan Library Digital Collections. *Kelsey Museum of Archaeology Art & Artifact Collection*. <https://quod.lib.umich.edu/k/kelsey> (2022 年 10 月 31 日閲覧)
- Wilson, A. 2018-2019 Female Terracotta Figurines from Kom Wasit and Kom al-Ahmer, Egypt. *Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 45: 111-124.
- 河合 望・吉村作治・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美・S. イクラム 2020「第4次北サッカラ遺跡調査概報」『エジプト学研究』第26号 12-31頁。
- 河合 望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・馬場悠男・坂上和弘・S. イクラム 2020「第5次北サッカラ遺跡調査概報」『エジプト学研究』第26号 32-61頁。
- 神林恒道・潮江宏三・島本 浣(編) 1989『芸術学ハンドブック』勁草書房。
- 佐々木英也(監) 1989『オックスフォード西洋美術事典』講談社。
- 丹野 郁 1985『服飾の世界史』白水社。
- 中村るい 2017『ギリシャ美術史入門』三元社。
- 芳賀京子・芳賀 満 2017『古代：ギリシアとローマ、美の曙光』西洋美術の歴史1 中央公論新社。